

図書館通信

日大鶴ヶ丘高校図書館 第5号 令和2年7月発行



図書館部主任より

一足早く3学年の、その後1, 2学年の確認試験が始まりました。本来の定期試験に当たるものです。生徒の皆さんは、既に学習した内容についての試験を受けつつ、次の試験内容も並行して学習するという、今までにない状態で勉強を進めていくことになりました。もちろん教員の方も初めての経験です。

新型コロナウイルスの影響で、様々な「初めて」を経験する事になりました。でもこれは悪いことばかりとも言えないと思います。初めての経験は、**新しい可能性**を開いてくれる一面もあります。何事も初めては困難なものですが、その困難に楽しく前向きに取り組んで行けるか否か、それがこれからの時代を生きていく上で、大きな力になりそうです。そのために先ずやることとは何でしょう。・・・**自分を信じることでしょうか。**自分には必ずできる・・・と。単純ですが、これがスタートかなと思いますが、皆さんはいかがですか。

図書館紹介・・・その3 「鶴高教員の選ぶ平成の30冊」

時代が平成から**令和**に変わった時期、新聞等メディアの世界では、**平成**を振り返る様々な企画が行われました。

本の世界でも、例えば「朝日新聞 平成の30冊」、「30年を振り返る講談社文庫平成の100冊フェア2018」、「平成の30年間 書籍ベストセラーから見えるものは NHK NEWSWEB」などなど。

鶴ヶ丘高校も、先生方に「平成に出版された本」という条件で、心に残る1冊をアンケート調査しました。思えばこの企画が、図書館として令和になって最初のものだったと思います。

では、その結果を振り返って見ましょう。発表順は特に意味はありません。

『「ない仕事」の作り方』みうらじゅん 『13才ハローワーク』村上龍

『black Box』伊藤詩織 『IQ84』村上春樹 『R帝国』中村文則 『愛なき世界』三浦しおん 『一千一秒の日々』島本理生 『海賊とよばれた男』百田尚樹 『顔二モマケズ』水野敬也

『架空通貨』池井戸潤 『火車』宮部みゆき 『カラフル』森絵都 『嫌われる勇氣』岸見一郎

『切れない糸』坂本司 『国家と教養』藤原正彦 『最後の息子』吉田修一 『砂漠』伊坂幸太郎

『三月のライオン』羽海野チカ 『鹿の王』上橋菜穂子 『七人のシェイクスピア』ハロルド作石

『銃・病原菌・鉄 1万3000年にわたる人類史の謎』ジャレド・ダイヤモンド

『情緒と創造』岡潔 『女子的生活』坂本司 『ジョジョの奇妙な冒険 黄金の風』荒木飛呂彦

『絶歌』元少年A 『先年樹』萩原浩 『大富豪からの手紙』本田健一

『椿山課長の七日間』浅田次郎 『手紙』東野圭吾 『デッドエンドの思い出』吉本ばなな

『青空の卵』坂本司 『動的平衡～なぜそこに生命があるのか』福岡伸一 『パーマメント野ばら』

西原理恵子 『バナナフィッシュ』吉田秋生 『ハリーポッター（全シリーズ）』J・K・ローリング

『殺人犯はそこにいる』清水潔 『深い河』遠藤周作 『シーヴズ英国紳士録シリーズ・シーヴズシリーズ』勝田文・森村たまき

『プリンセストヨトミ』万丈目学 『平成三十年』堺屋太一

『ほんくら（上中下）』宮部みゆき 『学び方を学ばせるイギリス式ゆとり教育』宮北恵子

『マンガでよくわかるエッセンシャル思考』グレッグ・マキューン

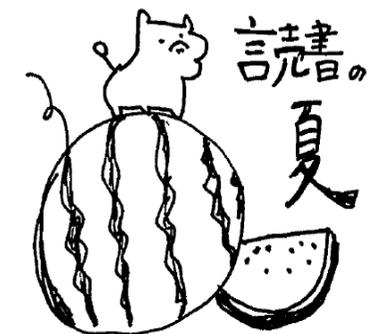
『身の丈にあった勉強法』菅広文 『もの食う人びと』辺見庸 『夢をかなえるゾウ』水野敬也

『ライフシフト 100年時代の人生戦略』リンダ・グラットン 『楽園のカンバス』原田マハ

『英文表現力を豊かにする例解和文英訳教本文法強制編』小倉弘 『冷静と情熱のあいだ（Blue）』辻仁成

『レストレス・ドリーム』笙野頼子 『ローマ人の物語』塩野七生

いかがだったでしょうか。新型コロナウイルスに取り紛れていましたが、新元号「令和」になったのは、昨年5月1日。1年2ヶ月が過ぎようとしています。ウィルス感染の視点から「2週間」という単位で日常を測る物差しが身につけてしまいましたが、時には物差しを変えてみることも必要です。10年後、20年後の自分のために。



目読書を通して考えよう

今回は詩を取り上げます。中原中也の「月夜の浜辺」。

月夜の晩に、ボタンが一つ	月夜の晩に、ボタンが一つ	月夜の晩に、拾ったボタンは
波打ち際に、落ちてゐた。	波打ち際に、落ちてゐた。	指先に沁み、心に沁みた。
それを拾つて、役立てようと	それを拾つて、役立てようと	月夜の晩に、拾ったボタンは
僕は思つたわけでもないが、	僕は思つたわけでもないが、	どうしてそれが、捨てられようか？
なぜだかそれを捨てるに忍びず	月に向かってそれは抛れず	
僕はそれを、袂に入れた。	浪に向かってそれは抛れず	
	僕はそれを、袂に入れた。	

「月夜の晩に」で始まるまとまりが4つ（起承転結）、全体6連よりなる詩です。「袂」はたもと、「抛る」は放ることです。特に難しい言葉もなく、7音を基調とするリズムカルな調子は、暗唱するにはもってこいの詩です。中也の第2詩集『在りし日の歌』に収められたもので、この詩集には「亡き児文也の霊に捧ぐ」と献辞が添えられています。今回は、そのような作者を取り巻く歴史的なことは一先ずワキに置いて、「ボタン」とは何かを考えましょう。作者にとってではありません。あなたにとってです。特に役立ちそうにも思えないが、捨てるに忍びない、心に沁みる存在。そのようなものが、あなたの身の回りにありませんか。目を凝らし、心を研ぎ澄ましみつけてみましょう。そして、そんな大切な存在に気づかせてくれた「月夜の浜辺」とはどんな空間ですか。もちろんあなたにとってです。ありふれた日常を新鮮な視点で見直すきっかけを与えてくれる、文学作品の持つ働きの1つです。（この働きを「異化」といいます）



何が書かれているかは、簡単なようで案外難しいものです。私達が解釈しなければ、見えてきません。そして、その解釈は人それぞれ。そこには嫌でも読者の個性が出てしまいます。作品を通して明らかになるのは、作者の気持ち、いえそれ以上に読者の気持ちなのです。

目編集後書

「緊急事態宣言」が解除され、東京都では再び新型コロナウイルス感染者の数が増加して来ました。世界に目を向けると、アメリカで、中国で、ロシアで、ブラジルで、様々な問題が起こっています。私達はどうすべきなのか、広い視野に立って主体的に考えるという大変難しい判断と行動を迫られています。谷川俊太郎の「朝のリレー」のような視点で地球を見渡せたら、と思いませんか。

カムチャッカの若者が

キリンの夢を見ているとき

メキシコの娘は

朝もやの中でバスを待っている

ニューヨークの少女が

ほほえみながら寝がえりをうつつき

ローマの少年は

柱頭を染める朝陽にウインクする

この地球では

いつもどこかで朝がはじまっている

地球の自転という極めて物理的な現象を、この詩人は朝日のリレーと捉えました。当たり前現象に、新たな意味を与えたのです。では何のためのリレーなのでしょう。それは詩の後半に書かれています。興味のある方は調べてみて下さい。地球に向けられた優しい詩人の眼差しが感じられるはずです。

